

# 福岡県吉井町における伝統的建造物群の多様な活用

著者	菊地 達夫
雑誌名	生涯学習研究と実践 : 北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要
巻	8
ページ	225-234
発行年	2005-03-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00002296/">http://id.nii.ac.jp/1136/00002296/</a>

# 福岡県吉井町における伝統的建造物群の多様な活用

## Diversity of Practical Use of the Traditional Building Areas in Yoshii Town, Fukuoka Prefecture

菊 地 達 夫

KIKUCHI, Tatsuo

### 抄 録

本研究では、伝統的建造物群の多様な活用を、福岡県吉井町の事例を通じて、若干の地理学的考察をする。吉井町は、重要伝統的建造物群保存地区に指定されており、それを中核としたまちづくりをすすめている。具体的には、ひなまつり開催における広域的な地域活性化に加え、自治体、地域住民による独自の試みも展開している。これらの実態について、調査地域への現地観察、関係機関での資料収集、地域住民への聞き取り調査を統合して、論じたい。

### I はじめに

日本各地における伝統的建造物群の活用は、まちづくりの中核事業において、有力な観光資源として再評価され、地域活性化につながるという認識が強い。これまでも、重要伝統的建造物群保存地区に加え、市町村や都道府県単位で保存活用に取り組む自治体はみられた。こうした動きは、伝統的建造物群の活用が地域活性化に適する一端を示すものと解釈できよう。保存活用は、多様にあるが、博物館資料としての活用、観光産業としての活用、居住地や一般産業としての活用に分けることができる。むろん、多くの地域は、併用しての活用も多いが、地理的空間の性格として、ある程度の方向性を確認できる。

最近は、人文社会的事象に加え、自然的事象についても、単なる保存からそれらを活用する動きが一部にみられる。とりわけ、世界遺産登録の地域において顕著であり、青森県、秋田県の白神山地や鹿児島県の屋久島をはじめ、世界遺産登録を目指す北海道知床においても、観光資源化に期待する動きがある。また、白川郷（人文社会的事象の世界遺産登録地）でも、世間の注目を集め、観光客の入り込みの増加に貢献し、地域活性化につながった。他方、本来の保存活用の趣旨にやや反する課題も浮き彫りとなり、地域住民の思惑を超える事態になっていることも少なくない。

伝統的建造物群などの希少性ある観光資源は、観光客を迎えるにあたっての取り組みを検討する時期に来ているかもしれない。本稿では、伝統的建造物群を、地域住民の柔軟なアイデアで多様な活用をする事例について考察していきたい。調査地は、福岡県吉井町を取り上げ

る。吉井町は、ひなまつりをはじめとする各種行事に加え、多彩な観光地図の発行や散策路の設定など、伝統的建造物群を多様に活かす試みをしている。そこで、活用の実態について、若干の地理学的考察をする。

調査は、2004年2月に行い、時間の許す限り現地観察をしながら、並行して関係機関での資料収集を行った。また、聞き取り調査は、博物館、観光店舗、地域住民とのコミュニケーションを通じて行った。

## Ⅱ ひな人形を活用する伝統的建造物と広域的な地域活性化

### (1) 九州地域におけるひなまつり

九州地域におけるひなまつりは、9市2町の11カ所で2月～4月にかけて開催される（第1表）。開催市町は、福岡県吉井町、柳川市、八女市、大分県中津市、日田市、杵築市、佐賀県佐賀市、長崎市平戸市、熊本県人吉市、宮崎県綾町、鹿児島県鹿児島市で、九州すべての県に分布する。これらの市町は、歴史的な建造物の残る場所が多く、重要伝統的建造物群保存地区の指定やそれに準じる保存指定となっている。開催期間は、綾町の10日間が最短、人吉市や鹿児島市の2ヶ月が最長、概ね1ヶ月や1ヶ月半のところが多い。

第1表 九州におけるひなまつり開催一覧（2004年度）

県 名	市 町 名	ま つ り 名	開 催 期 間
熊本県	人吉市	人吉琢磨は、ひなまつり	2月1日～3月31日
大分県	中津市	城下町中津のひなまつり	2月15日～3月14日
大分県	日田市	天領日田おひなまつり	2月15日～3月31日
福岡県	吉井町	筑後吉井おひなさまめぐり	2月15日～4月3日
長崎県	平戸市	平戸温泉・城下雛まつり	2月15日～4月3日
宮崎県	綾町	綾ひな山まつり	2月21日～3月3日
佐賀県	佐賀市	佐賀城下ひなまつり	2月21日～3月31日
鹿児島県	鹿児島市	薩摩のひな祭り	2月21日～4月22日
大分県	杵築市	城下町散策とひいな(雛)めぐり	2月22日～3月14日
福岡県	柳川市	柳川さげもんめぐり	2月29日～4月3日
福岡県	八女市	八女ぼんぼんまつり	3月1日～3月31日

資料）ひなの国九州ガイドブック（九州のひなまつり広域振興協議会発行）

九州地域のひなまつりは、単なるひなまつりのイベント開催だけではなく、周遊観光を促す工夫をしている。スタンプラリーを開催し、11か所（パーフェクト賞）、5か所（ファイブスター賞）、3か所（トリプル賞）の訪問数に合わせ、応募抽選できるようにしている。各地には、主要な観光施設にスタンプコーナーを設置している。また、並行して、旅行券や土産が当たるひなの国九州賞、各地賞、るるぶ賞も行っている。

ひなの国九州ガイドブック（ひなまつり広域振興協議会発行）には、11か所を巡るために、空港や高速道路のアクセス図、各地の観光情報、ホームページアドレス、主要な行事の掲載に加え、本紙提示による参画施設の割引特典も付いている。また、各地のひな会席の写真を掲載し、食巡りの観光を楽しめる情報も提供している。

各地のひな人形の公開は、主として伝統的建造物や商業施設で行われている（写真1・

2)。各家で代々保存してきた江戸期などの貴重なひな人形をみることができる。他地域における伝統的建造物の活用は、家屋展示や観光店舗が多い。ひな人形を公開する九州地域の伝統的建造物は、民家が多く、家屋の一般公開をひなまつりの一時期に限っているところも少なくない。しかしながら、ひな人形の公開と伝統的建造物の組み合わせは、新たな特色ある活用として期待が大きい。次節では、福岡県吉井町を事例として、みていきたい。

## （2）筑後吉井のおひなさまめぐり

福岡県吉井町は、県南部にあたり、南部に耳納連山、北部に筑紫山地、その間を筑後川が蛇行する。また、筑紫平野の最も東端にあり、大分県との県境に近い。町内には、JR久大本線と国道210号線、大分自動車道が東西を貫通する。吉井町は、1955年に旧吉井町、千年村、福島村、江南村と船越村の一部を合併し、現在の町域（現吉井町）が確定した。

中世・近世における筑後地域は、平地豊後街道の宿駅となり、政治・経済の重要な役割を果たし、宿場町や在郷町として栄えた。その結果、江戸末期から明治初期まで、多様な加工業が成立した。例えば、酒、醤油、油、砂糖、製粉などが挙げられる。産業の成立によって、貨幣が集中し当時「吉井銀」と呼ばれた。

考古資料としては、国重要文化財指定月岡古墳出土品、国指定史跡尾形古墳群（珍敷家、原、鳥船塚、古畑の4基）、日岡古墳といった装飾古墳も点在する。

吉井町は、12回目となる筑後吉井おひなさまめぐりを2月15日から4月3日にかけて開催した。過去には、筑後吉井おひなさまめぐり実行委員会を組織してきたが、現在は観光協会が主催する。案内事務所は、吉井町観光会館土蔵に置く。展示時間は、営業店舗を除き、午前10時から午後5時までとなっている。また、つばき盆栽展、切り紙展、おりがみ展などを同時開催している。

ひな人形の展示場所は、ほぼ毎年、20か所程度になっている。2004年度の場合、21か所で、ほぼ重要伝統的建造物群保存地区内に位置する。具体的には、商業施設、飲食店（写真3）、ギャラリー、公共施設、民家、土蔵（写真4）がある。ひな人形は、江戸期から明治期、大正期、昭和初期までの貴重なもので、家宝として受け継がれたものである。とりわけ、吉井町では、「おきあげ」や「箱びな」といったひな人形が珍しい。これらは、町内の金子文夫資料展示館（有料）で常時見学することができる。他方、多くのひな人形は、各展示場所にてほとんど無料でみることができる。また、観光会館土蔵横には、巨大ひな壇飾りがあり、記念撮影場所となっている。さらに、期間中の毎週日曜日に人力車乗車にて、ひな人形を巡る観光コースも設定されている。

以上から、吉井町では、重要伝統的建造物群保存地区において、ひなまつりをはじめ多様な地域活性化の動きを確認できた。また、ひな人形の見学は、無料展示の多いことから、単なる営利目的につなげるのではなく、観光客の周遊観光に対するサービス性が大きい。

九州各地におけるひなまつりの開催が、伝統的建造物群を中心とする点も興味深い。すでに述べたように、多くのひな人形は、代々受け継がれてきた由緒あるものばかりで、博物館資料

としての価値は高い。伝統的建造物を活用して公開する試みは、話題性だけではなく、その民家の経済的基盤を探るきっかけにもなろう。すなわち、多くのひな人形は、町内や近隣で購入されたものではなく、京都や関東方面のことが多い。これは、ひな壇の規模をみても、高価であることは疑いない。そうした経済力は、一定の地理的空間における生業の発展に関連性を求めることができよう。現に吉井町は、過去に経済の中心地として栄えた在郷の町であった。



写真1 伝統的建造物群内に展示されるひな人形（大分県日田市）



写真2 伝統的建造物群内に展示されるひな人形（福岡県柳川市）



写真3 伝統的建造物「碓井本家」の様子（内部は飲食店）



写真4 ひな人形の展示場所「中川土蔵」の様子



写真5 蔵しっく通り（国道210号線）付近の白壁建造物の景観

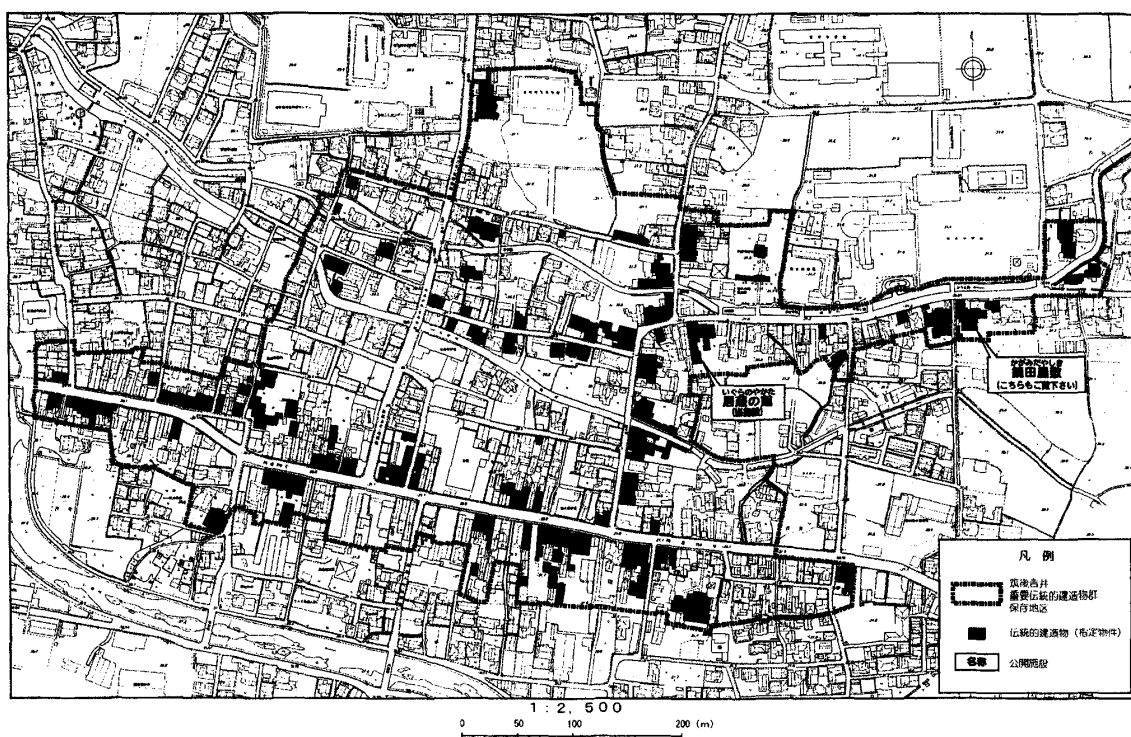


写真6 吉井町における白壁通りの景観（日中は歩行者天国）

### Ⅲ 伝統的建造物を活用した地域的特色

#### (1) 伝統的建造物群の特色

町内に分布する白壁の土蔵造りは、3度の大火を経験し、その防火対策として、建築した町並みである。また、耐火性に優れた建築は、吉井町の経済発展による富の蓄積によって可能となった。町並みは、1996年、旧豊後街道(現国道210号線)沿い(写真5)を中心に、西は高橋神社、東は若宮八幡宮、北は文化会館を含む一帯を、重要伝統的建造物群保存地区として国指定を受けた(写真6・第1図)。保存地区内の指定物件は点在するが、その多くは商業施設や民家として現在も活用している。また、旧豊後街道には、町を区切る枡形の景観も残されている。



第1図 吉井町における重要伝統的建造物群保存地区の概観  
資料) 吉井町教育委員会公開資料(居蔵の館)より。

白壁造りの建築様式は、大きく3つに分かれ、完全防火型土蔵造り、準防火型土蔵造り、真壁造りとなる。完全防火型土蔵造りは、通称「白壁土蔵なまこ壁」と呼ばれ、外側に木材が出ないように柱や軒裏まで漆喰で塗り、1階部になまこ壁がみられる。また、2階部の窓には、鉄の扉で頑丈に守られている。準防火型土蔵造りは、開口部が広く格子の美しさが特徴である。全体的に漆喰の部分は少ないものの、2階軒裏に延焼を防止するため、必ず漆喰が塗られている。真壁造りは、大通りにあまり面していない町屋や屋敷型の建物にみられる。とりわけ、延焼の心配が少ないため、漆喰を塗っておらず柱が外にむき出しとなっている。

公開伝統的建造物は、居蔵の館(写真7)と鏡田屋敷(写真8)のわずか2か所しかない。いずれも、教育委員会生涯学習課の管轄において、見学は無料としている。また、リーフレッ

トの常備と常駐の解説員を置いている。さらに、有料ではあるが、広間を会議室として使用できる。

居蔵の館は、旧松田家であり明治末期に建築された。主屋は、入母屋の妻入り建物で、防火機能をもつ白壁土蔵造りである。1階は、通り土間に沿って、オモテノマ、オモテノナカノマが続き、ゲンカン、ブツマ、ザシキと広がる。オモテナカノマには大型の神棚が置かれた吹き抜けがあり、便所と風呂場につながる。

鏡田屋敷は、旧籠田家であり幕末から明治初期に建築され、屋敷と2階を明治26年に増築したとされる。この建造物は、現存する唯一の屋敷型建造物として希少性は高い。もともとは、郡役所の官舎として建築したものであるが、明治後期に郵便局長であった佐藤氏にわたり、昭和初期に籠田氏が居住し始めた。敷地内には、水路から引き込んだ池や庭園が広がっている。加えて、北東部の土蔵は、現在、尾形家住宅として活用されている。

1991年、この建造物は、台風の被害を受け、解体される予定であったが、籠田氏（佐賀市在住）が町に寄贈し、町並み保存の重要な役割を担うことになった。その後、町並み環境整備事業により修理復元工事を行い公開伝統的建造物になった。

他に、博物館施設として菊竹六鼓記念館（写真9）、町立金子文夫資料展示館、町立歴史民俗資料館が保存地区内に位置する。

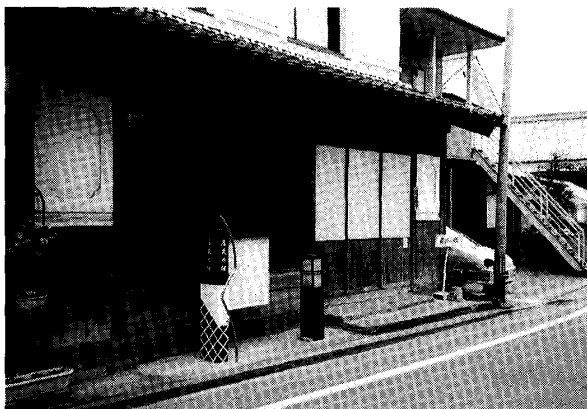


写真7 公開伝統的建造物「居蔵の館」の正面口



写真9 菊竹六鼓記念館



写真8 公開伝統的建造物「鏡田屋敷」の景観

## (2) 多彩な観光地図

町内で配布されている観光地図は、7種類にも及ぶ。むろん、期間限定の地図もあるが、他地域ではあまり例をみない。そのほとんどは、重要伝統的建造物群保存地区を含むものである。具体的には、吉井町マップ、吉井町文化財マップ、吉井のまちめぐり案内、吉井まるごと体感2DAY散策MAP、筑後川自然公園マップ、筑後吉井おひなさまめぐり、句碑めぐり、筑後吉井の小さな美術館めぐり会場案内である。これらの観光地図は、観光会館土蔵内で収集できる。

吉井町文化財マップと筑後川自然公園マップは広域的な地図であり、筑後吉井おひなさまめぐりと筑後吉井の小さな美術館めぐり会場案内は期間限定の地図である。また、吉井町マップは、主要な観光資源の景観写真を盛り込んだものであるが、解説文に英訳もみられる。こうした試みは、地図以外にも筑後吉井おひなさまめぐりの説明としてB4版の英文のものを確認できた。筆者のこれまでの調査では、地名などの英文表記はみられたものの、観光資源や観光行事の説明の類までの事例は確認できなかった。吉井町は、内陸部に位置する小規模な自治体に過ぎず、海外との定期航路を結ぶ港湾や空港はなく、外国人の入り込みが多い地域といえない。

以上から、多彩な観光地図は、伝統的建造物群を中核としながら、多様な観光資源の情報を発信することで、観光客の誘引を促し、地域活性化につなげようとする姿勢を強く感じる。

次に、重要伝統的建造物群保存地区を散策するテーマ別のコース設定を特筆したい。いずれ

第2表 吉井のまちめぐり案内（テーマ別散策路の見学順）

順	見所いいとこと	水の道	寺と社	産業と建築
1	土蔵	土蔵	土蔵	土蔵
2	居蔵の館	南新川	六地藏	民俗資料館
3	鏡田屋敷	オの木溝	俳句石碑	江嶋表具店
4	清光禅寺	立体交差水路	御堂	長尾製麺
5	白壁通り	堀田の井戸	東光寺跡	金市屋おこし
6	蔵しっく通り	災除川	素鳴神社	上野米穀店
7	中川土蔵	巨瀬川	清光禅寺	旧大庄屋門
8	橋形	荷揚げ場跡	光琳寺	仏具屋
9	洋館	川の合流点	灯籠	菓子とくど屋
10	草葺きの町屋	明治の石橋	浄満寺	白と黒漆喰の家
11	水神社	水神社参道	祇園社跡	白壁通り
12	オート三輪	水車跡	円応寺	松源商店
13	土蔵	土蔵	高橋神社	菓子あけぼのや
14			西蔵寺	エシマ薬局
15			六角堂	菓子トング屋
16			天満宮	梅の屋醤油
17			廃寺跡	林肥料店
18			妙見神社	居蔵の館
19			水神社	鏡田屋敷
20			法琳寺	旧天国酒造
21			土蔵	安脚場
22				安武製油
23				土蔵

資料) 吉井のまちめぐり案内（観光地図）

注) 4コース、いずれも重要伝統的建造物群保存地区内の徒歩散策路。



も、観光会館土蔵を発着とする徒歩コースである。地図（吉井のまちめぐり案内）には、九州芸術工科大学の女子学生によって、伝統的建造物をはじめとするイラストが描かれ、散策の意欲がわき立つ。各テーマの観光資源は、順にそって12か所から22か所までの見学場所となっている。

テーマ「見所いいとこどり」は、伝統的建造物の魅力を堪能できるよう最短の散策コースを設定したものである。公開伝統的建造物をはじめ、貴重な町屋や土蔵が見学（12か所）できる。テーマ「水の道」は、産業や生活との水の関わりが理解できるような見学場所を設定している。河川はもちろん水路や井戸、水車跡や荷揚げ場跡を見学（12か所）する。テーマ「寺と社」は、町屋と違う地域資源に関心が向くような工夫をしたものである。石碑、寺社、庭園、古木を見学（20か所）する。テーマ「産業と建築」は、産業の面影を残す建築物を巡るもので、最も見学場所（22か所）が多い。見学場所のほとんどが、商業施設となっている。

各テーマの見学場所は、いずれも重要伝統的建造物群保存地区内に分布するものであり、同じ散策路を辿ることもある。自明のことであるが見学場所や事象は、ほとんど相違する。すなわち、同じ地理的空間ではあるが、多面的な視点で見学できるような工夫をしている。こうした試みは、多様な情報を収集し、歴史空間（伝統的建造物群）をより正確に理解する新たな方法として評価できる。

### （3）吉井まちなみ通信の情報発信

重要伝統的建造物群保存地区をはじめ、それに準じる地域では、町並み保存に関わる文字情報（広報紙）を定期的に発信するところがみられる。これらは、観光客への情報発信と同時に地域住民への保存意識を高める役割も大きい。菊地（2004）では、長崎市における出島地区の広報紙の意義について若干触れた。

吉井町で定期発行する吉井まちなみ通信は、地域住民の組織する「吉井町並みをよくする会」によるものである。事務局は、町内教育委員会に設置している。本会は、1994年12月に発足し、約9年が経過した。重要伝統的建造物群保存地区の指定が、1996年であるので、それ以前から活動していたことになる。活動は、町内に位置する地域資源（とくに伝統的建造物）の保存に加え、それを最大限に活用して、町おこしにつながることを目指したものである。すなわち、観光活用による地域活性化に発展することを大いに期待した。本会は、幾度かの伝統的建造物群が残る他地域に研修視察を行っている。2003年には、豊後高田市を訪問し、その知見の概要を本通信に掲載している。豊後高田市を選定した理由として、人口がほぼ吉井町と同じであるのに、観光客の入り込みは差異のある点に注目した。研修成果は、解説版の設置、ボランティアガイド養成の確立、飲食店での試飲食といったことに着目し、地域活性化の保存活用について探った。これらの報告は、観光旅行のような紀行文的なものではなく、聞き取り調査を中心とした調査報告の性格が強い。

他の掲載記事として、町内の児童生徒を対象とした町並み絵画コンクール結果発表があった。作品自体は、菊竹六鼓記念館に一定期間展示された。重要伝統的建造物群保存地区の位置

する自治体では、単発的な学校教育として伝統的建造物の写生会を実施するところはあるが、市町全体として取り組むところは珍しい。伝統的建造物は、学校教育の社会科、地理歴史科、総合的な学習の時間で、有力な学習教材となるが、他教科での活用は少ない。他方、より多くの教科で伝統的建造物を取り上げることは、保存活用の意識を高めるためにも、効果的であり、本通信に掲載する意義はあろう。

以上から、吉井まちなみ通信は、児童生徒から一般成人までを対象とした地域住民に対しての情報発信の性格が強い。一方、通信を一読する観光客は、地域住民の保存活用に対する意識の高さを理解することはできる。結果、単なる観光行動から生涯学習へ変化させる間接的な役割を期待できる。

#### Ⅳ おわりに

本稿では、福岡県吉井町を事例としながら、伝統的建造物群を活用した多様性に注目し、若干の考察を試みた。吉井町は、筑紫平野の一部に位置するものの、南北に山々が連なる盆地上の地理的環境に近い。このような中山間地域にありながら、数多くの加工業の成立を基礎に、多くの富を生み、防火対策となる白壁造りの町並みに変貌した点は興味深い。そのため、防火対策を有する建築物の集積が、伝統的建造物群となる事例はそれほど多くはない。

ところで、昨今の日本各地では、台風、地震、集中豪雨、火山などの自然災害による深刻な影響が頻繁に目につくようになった。こうした災害は、過去にも同じように繰り返され、人間の知恵がそれに耐えうる新たな建造物の建築に活かしてきた。吉井町の白壁造りの町並みは、単なる希少性ある地域資源としての価値に加え、災害を克服してきた人間の知恵の偉大さをも語っている。

地域住民の知恵は、形を変え伝統的建造物群を中核としたまちづくりに活かされている。それが、ひなまつり、多彩な観光地図、まちなみ通信といった取り組みで確認することができる。とりわけ、散策路をテーマ別に設定した観光地図は、伝統的建造物群を多面的に捉えることを可能にし、大変意義深い。

すでに述べたように、一連の取り組みは、地域住民だけではなく、観光客にも刺激を与え、観光を媒体とした生涯学習に発展する期待が大きく、見習う点が多い。

#### 謝辞

福岡県吉井町における関係調査機関には、限られた時間の中で、聞き取り調査や資料提供に応じていただいた。記して感謝を申し上げたい。

#### 文献

大河直躬編（2000）：『歴史的遺産の保存・活用とまちづくり』、学芸出版社。

菊地達夫（2004）：伝統的建造物群を活用した観光空間の基礎とその特色、北海道浅井学園大

学生涯学習研究所研究紀要第7号、pp.191-205。

菊地達夫（2004）：長崎市における伝統的建造物群の活用実態と地域連携、観光研究論集第3号、pp.29-35。

北川宗忠編（2004）：『観光文化論』、ミネルヴァ書房。

合田昭二・有本信昭編（2004）：『白川郷』、ナカニシヤ出版。

駄田井正・西川芳昭編（2003）：『グリーンツーリズム文化経済学からのアプローチ』、創成社。

全国町並み保存連盟編（2000）：『新・町並み時代まちづくりへの提案』、学芸出版社。

保岡孝之（2003）：『伝統の町並みの歩き方』、青春出版社。

麦屋弥生・羽田耕治・牧野博明（2002）：産業遺産の観光活用事例の類型化に関する研究、日本観光研究学会第17回全国大会論文集、pp77-80。

山本真希（2004）：まち並み保存運動と空き屋、日本地理学会発表要旨集NO66、p166。